
マリッサ・ノエル、エレ・ノエル

七瀬なな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マリッサ・ノエル、エレ・ノエル

【Nコード】

N9450C

【作者名】

七瀬なな

【あらすじ】

金髪碧眼の王族のなかで唯一、赤毛の王子イーダス。孤独にさまよう彼が憩える、深い森。そこで出会った白蛇の化身が、一国の運命を揺さぶる……。

（大昔に書いた習作なので、あちこち書き直したくもなりますが、まあ、わりとそのまんま、打ち込んでいます）

序（前書き）

孤独な王子と姫のお話。

自分が孤独を感じていた頃、できたお話です。

家族もいて、友人もいて、ひとりきりではなかったのに、孤独だった。

いまはそうでもありませんが、当時はこういう話をかくことが、必要でした。

いま、この話を必要としているひとが、いるのかな。

いないといいな、と思います。

もし必要なひとがいるなら、そのひとのもとへ、届きますように。タイトルの意味は、最後にわかるしかけになっています。

といって、最後からよむなんてそんな反則は、いやよーん。

序

おれはイーダス・レムノスクという。
もつとも、おれをフルネームで呼べる人間など、今のこの世には、
一人も存在してはいないのだが。

二百年前なら、たしかにいた。
しかし今はいない。

だれにも教えたことがないのだから。

おれはイーダスと呼ばれている。
ただのイーダスだ。

おれを快く思っていない連中からは、よく「赤毛野郎」とも言われる。

この髪の色に由来することは明白だ。

おれは、なんとも思わない。
別段、腹も立ちはしない。
もついい加減、慣れたからでもある。

おれは、どこのだれよりも異邦人だ。
だれのどんな思惑も、おれの感情の琴線にふれはしない。
二百年もの時を経た、今のこの人生など。
付録も同然の代物だからだ。

ノエルタリア。

この名の響きだけが、いまだに虚ろに木霊する。

虚ろなおれの耳に。

ノエルタリア。

ノエルタリア・ナハシャザーレ。

おれのすべて。

誇り高き姫君。

白い炎。おれの永遠の。

運命の女。

二百年前のおれは、けっこういいとこの坊ちゃんだった。

今はこの地上から消えてなくなっているが「レムノン」という王国が当時はあったのだ、西方に。

レムノン。

もうわかったろう。

おれの名は先刻、紹介したな。

イーダス・レムノスクだ。

国名を姓とする、この意味がおわかりだろうか。

おれはつまり、王家の末裔というわけだ。

実際たいしたものだったのだ。

けれど、たいしたものだったのは、おれのご先祖やおれの親で、おれではない。

おれはといえば、神経質で貧弱な、王族とも思えぬような、みすぼらしい子供だった。

もの心ついてから十四になるまで、おれは自分のあらゆる面に劣等感を抱き続けていたものだが。

わけても強烈だったのは、この髪の色に対してだ。

錆びついた金属のような茶褐色。

おまけに少し、縮れている。

おれには兄が一人、弟が一人、妹が三人いたが。

（ただし母親はそれぞれ違う。原則として王家の長たるもの、一度子をなした女性とは以後、契らぬのがしきたりだった。どうしてそんな決まりだったのかは不明だが、とにかく建前は、そういうことになっていた）

みな直毛のプラチナブロンドを自慢気になびかせ、見下すような薄青の瞳を持っていたものだ。

おれは瞳の色も、兄弟たちとは違っていた。
深緑。

「底無し沼のように不吉な」という飾り言葉が、常につきまとうていたっけか。

「この子はわしの血をひかぬ」

王はおれを一目見て、そう断言したそうだ。

金髪碧眼の王は。

母はその場で自害して果てたという。

よくぞおれを道連れにしてくれなかったものだ。

おかげでおれは幼少年期中、肩身の狭い思いをし、立派な腺病質の鎧をまとう憂き目を見て。

王宮という名の地獄に、血の鎖でつながれた。

おれを生かしておいたのは、もしかしたら彼女の、おれに対する復讐であつたかもしれない。

そういう暗い宿命を生後まもなく背負わされた人間が、どうして明るく育てるものか。

周囲も徹底的に冷たかった。

乳母や教師たちは、義務感まるだしで、おれに接した。

はずれクジを引いてしまった。

出世も望めぬ、こんな王子に仕える羽目になるなんて。

声にもならぬ、つぶやき。

目が語る、あけすけな本心。

おれは神経質なくらい敏感な子供だったから、わかってしまっただ。

それがまた、彼らには気に入らなかった。

当然だ。

おれもまた、芝居は下手だった。

愚者を演じ切れるほど、器用でも、利巧でもなかった。

「扱いにくい子供」というレッテルを、彼らはおれの顔に、背中に、貼りつけた。

生半可なことでは剥がれぬよう、一人一人がそれぞれの手で、それはそれは丁寧な、執拗に。

だからおれは、森が好きになった。

城のすぐ裏手にあって滅多にひとは来ない。

弱虫の見本のようだったおれが、乗馬だけは、どの王子より上達が早かったのは、森へ行って一刻でも早く多く、一人になりたい一心でのことだったのだ。

おれは味噌つかすだったから、供なぞいない。
いても、まっとうな者ではない。

ついて来なくていいと言えば、待ってましたとばかりに踵を返し、真っ昼間から一杯ひっかけたり、台所女とフザケ合ったりしにゆくのだ。

当時のおれはまだほんのガキで、少なくとも今よりは下品でなかったから、これほどあからさまに言ったり考えたりはしなかったが、それでもたしかに、そんな連中に良い感情は抱いてなかったように記憶している。

おれは一人で森のあちこちを徘徊した。
暇さえあれば、森へ逃げ込んだ。

初めて森で夜明かした時はさすがに叱られたが、おれは辛抱強く、周囲を馴らした。

おれの森がよいが、ある程度周囲に認められるようになった頃、夜明かしという、とんでもなく大胆な行動に出て、ちよつとばかり彼らの肝を冷やす。

それからまた、しばらくは大人しく、いい子にして、日暮れ前の早い時刻に帰って来てやる、そして徐々にまた帰城時刻を遅くしてゆく……ふん。

ずいぶん気を遣ってやったものだ。

努力は報われた。

そのうち、おれが一日中森に入り浸っても、だれも文句を言わなくなった。

もともとおれは、たいして重要な存在ではなかった。

たとえばおれが森で迷子になっても、最悪のたれ死のうとも、おれの搜索や葬儀の準備などで、なにかと忙しい目にあう程度の煩わしさだけで済む。

精神的に痛手をこうむる者など、いやしない。

悲しむものなど、だれもいやしないのだ。

それにおれは、方向感覚はわりにしっかりしていた。

おまえたちはおれのために無駄な骨折りをさせられる心配はないのだ、ということをし、きっちり態度で示してやった。

どれほどの危機に、たとえ死の危険に晒された直後であろうとも、毅然とした面持ちで、しっかり帰還してやるのだ。

実はおれも、最初から森の精たちに大歓迎で受け入れてもらえたわけでは、決してなかった。

落馬して怪我をしたりは日常茶飯事。

あわや首の骨を折るところ、だった場合も、無論ある。

道に迷って往生したりも、これまたほぼ毎日。

頭の中に地図が叩き込まれるまで、幾度「おれはここで死ぬ」と覚悟を決めたか。

一度など、桁外れに狂暴な大型の野犬に出くわして、あやうく喉

笛を食いちぎられそうになった。

白銀の長毛に覆われ、とくに胸の飾り毛が堂々たる印象を与えた。王の狩猟犬が、はぐれて野生化したものだ。

そういう例が、たまにあった。

そいつに遭遇したのは、不運だった。

相手を上手くなため、危険を回避する術もまだ、よく体得できていなかった頃だ。

あの時は、さすがに参った。

馬は驚いて逃げてしまいうし、おれはおれで恐慌をきたし、無我夢中で剣をふりまわし、どうした弾みでか犬を退治できたはいいが。

指が硬直し、剣が手から離れず、腰も抜けて、しばらく血の海で震えていなくてはならぬ有様だった。

そんな目に遭った後でも。

帰城の際には平静を装った。

たとえ服は血だらけ、泥まみれであつても。

凱旋。

そう、あれはまさに凱旋だったのだ、おれにとっては。

何事もなく城に帰り着いた時よりも、困難に出会い、乗り越えてきた時のほうこそ、おれは晴れやかな顔をしていたのではなかったろうか。

おれの破れた上着や、泥のこびりついた靴などに目をやり、互いに顔を見合わせる門番たちの複雑な表情は、おれを惨めな気分させるどころか、かえって痛快なくらいだった。

「一体なにがあつたのですか、王子」

おれはニヤリと笑ったきり、答えないのが常だ。得意になってありのままを喋ってしまったりしたら、森へ行くのを禁じられてしまうかもしれない。

おれの身が心配なのでなく、自分たちが面倒に巻き込まれたくないばかりに。

ゆえに、様々な噂が飛び交った。

野獣と大立ち回りをやったのだ、いやいや、あの王子にそんな真似ができるわけがない、崖から落ちたのだ、木の枝にでも躓いて派手に転がったか、はたまた妖精にからかわれたのか……云々。

しかし、どれも噂に過ぎぬので、だれも王に「おおそれながら」と訴え出ることは叶わなかった。

王はおれのために煩わされるのを、よしとしなかったので、見て見ぬふりを、決め込んでいた。

おれはと言えば、ますます森が好きになっていた。

森にとりつかれている、という陰口を小耳に挟んだこともある。べつに立腹も、傷つきもしなかった。

他人の言うことなど、どうでもよくなっていた。

失望も絶望も、とうの昔に卒業していた。

それに。

自分でも、その通りかもしれないと思ったからでもある。

おれの胸にはむしろ、誉め言葉めいて響いたものだ。

森は至福の場所だった。

危険でさえ、至福だ。

おれがヘマをすれば、反動が来るのは至極当然のことなのだ。
この髪の毛のせいでも、目のせいでもない。

森ではだれも、そんなものでおれを差別しない。

おれはおれの行動だけに責任を取ればいい。

おれにはどうすることもできぬ、この外見や生後まもなくの「忌
わしい出来事」などには一切、関係なく。

おれは気分のいい時には顔中をほころばせ、歌を歌うこともあつ
た。

また、悲しい時には大声で泣き喚き、大地に突っ伏すのだ。
物凄くむしゃくしゃする時は、巨木に体当たりを食らわせたり、
湖に飛び込んだりもする。

初めの頃は、足元のかよい草花を踏みにじったり、手当たり次
第、刃物で小枝を切り落としたりもしたのだが。

理性を取り戻した時に視界を占める、あの無残な光景が、おれの
良心を責め苛むので、やめた。

弱いものいじめは、どうも、おれの性に合わぬらしい。

けれど、森は、やがて。

どんな愚行を蛮行を、あるいは正義を振りかざそうとも、寛容な
腕をひろげて包み、受けとめてくれるようになった。

いつのまにか、すっかりおれを、森の共存者として容認してくれ
ていた。

取りも直さずそれは、おれ自身が森をそのまま、ありのままに、
受け入れていた、からでもあつた。

自然の恵み。

自然の脅威。

森は生きた教科書だった。

それまでお目にかかったどの教師よりも、雄弁かつ物静かな師だ。おまけに名医でもあった。

おれを丈夫にしてくれたのだ。

おれはしょつ中貧血を起こしてふらふらになったり、ちょっとした不注意で風邪をひいたり、こじらせたりして、とにかく身体が弱かった。

頭痛や腹痛、消化不良や原因不明の急な発熱などとは、一生つきあわねばならないと、悲愴な覚悟をしていたものだ。

それがどうだろう。

病魔は一匹残らず、おれの身体から退散して行ったのだ。

森がよいを始めてからというもの。

かわりに生キズは絶えなくなったが、回復力や痛みに対する慣れや抵抗力なども、それに比例してどんどん増して行ったので、たいして問題ではなかった。

ただ、外見は、あまり変わり映えがしなかった。

多少、血色が良くなったくらいで、相変わらずチビの痩せっぱちで、当たり前の話だが、依然として、髪は赤く、目は緑だった。

それにおれは、人間相手には、おいそれと感情を露わにしない習慣が、すっかり身についており、大人ばかりか兄弟にまでウケが悪かった。

皆がおれを無視したがるので、おれの変化に目を見張ったのは、主治医だけだった。

おれは声変りをし、十五の成人式まで、あと一年というところまで生き延びた。

いつものように、おれは森にいた。季節は初夏。

新緑がまばゆいばかりの生命力を放ち、蒼穹に雲の白さが一段と映えるこの時季は、森に生きる動物たちも、活発に動き回る。

とくに、この春生まればかりの子供たちは、みずからの元気を
持て余してさえいる、可愛らしい盛りだ。

まるまる、ころころ、よたよたしながら、周りのものすべてに、
無防備な興味を示す。

かれらの無邪気であぶなっかしい仕草に、おれは魅了されずには
いられない。

相好をメロメロに崩さずにいられない。

おれは早々に馬から降り、カシューナッツ入りのチョコレート菓
子を頬張りながら、ぶらぶら歩いていた。

鼻歌まじりの上機嫌。

顔見知りのキツネの夫婦に挨拶をしにゆくのだ。
たしか、可愛いチビを四匹連れていたはずだ。

菓子は少し残しておいてやろう、チビたちへのおみやげに。
はずむ足取りで彼らの巣穴に出向いてみれば。
そこは、もぬけのからだった。

「もう」

おれは一人ごちた。

「ひっこし魔なんだから」

頭上でカケスかなにかが、ケケケツという下品な笑い声に近い怪音を発した。

「なんだよお」

おれは顎を上に向け、片手を振り上げて、そいつを威嚇した。鳥は再びおれに、ひとしきり嘲笑を浴びせてから、余裕たつぷりに飛び去った。

おれはその場で、しばし考え込んだ。

彼らの新居を探してまわろうか。それとも今日はおとなしく、陽だまりの「冠花庭園」で静かに本でも読んでいようか？

恒例の月末試験が迫ってきているし、そろそろ自主学習に本腰を入れなくては。

今月はおれも気候の陽気さに浮かれてしまい、つい遊びすぎた。今がんばっておかないと及第点をもらえないかもしれない。それは困る。とても困るぞ。

待てよ。

本気で勉学に励むなら、うららかな花の絨毯の上よりも「眠竜樹」の根元のほうが落ちつけるのではないか……。

利き足に重心をかけて腕組をし、あれこれ悩んでいるうちに、おれは、のどの渴きをおぼえた。

あんなに菓子をぱくつくのではなかった。

思案の続きは、こいつをどうにかおさめてからにしよう。

「プランセット」

やや手前で待たせておいた愛馬を呼ぶ。

おれよりも遥かに深遠なる哲学的思考に耽っていたかのように、

孤高な立ち姿だ。

ゆったりとした歩様で、呼びかけに応じて近づいてくる。

ちなみに月末試験とは、おれと教師連中との間で取り決めた「相互のための妥協案」である。

おれは森にいたいし、教師連中の顔なんぞ見ていたくもない。

顔を見たくないのは向こうも同様だろうし、おれに付き合っ
て森へ来るのも真っ平だろうし、第一、おれが許さない。

この聖域に、あんなヤツらを入れるなんて。

だからおれは森で自習して、定期的に彼らの試験を受けるとい
う方針を提案したのだ。

連中は、しかつめらしく相談しあつたあげく、同意した。

彼らもそれぞれ、高尚なご研究やら私生活のゴタゴタやら人生を
楽しむのやらで、いろいろと、忙しいらしいから。

おれにかまけて貴重な時間をつぶすよりは、そういう事柄に当て
たほうが遥かに有意義ではないか、という、おれの誘い文句は、彼
らにとって、かなり美味しいエサであつたにちがいない。

おれにつけられた教師など所詮は、この程度の者ばかり。

おかげで助かっている。

熱血漢は手におえないからな。

プランセットの鼻面や首などを軽く叩いてやってから、おもむろ
に、その背へ跨る。

水飲み場は、おもに三箇所ある。「歌うせせらぎ」と「銀の泉」と「白蛇湖」だ。

どれもこれも、おれがつけた呼称だが、それぞれに一応の由来がある。ここから一番近いのは「白蛇湖」だ。

まあ単純な話なのだが、おれはその湖のほとりで、白蛇の脱皮を手伝ったことがあったのだ。

おれは蛇を嫌いではない。

最も、おれが嫌っている生物は唯一、人間だけだから、他の動物はたいがい嫌いではないのだが、蛇は特に、嫌いではない。

もしも誰かがおれに「一番好きな動物は？」と訊ねたならば、他の人間が「犬」とか「猫」とか返答するのと同様に目を細め、少々はにかみながら、

「蛇」

と答えるにちがいない。

こんな立ち入った質問を、おれに投げかける物好きは存在しないので、機会がないのだが、もしも巡ってきた場合、こう返事をすることに決めている。

大抵の輩はお気に召さないだろうが、それがどうした。今さらだ。

媚びへつらつても決して好かれないものならば、本音を口にして嫌われたほうが、いっそ小気味よいと言うものだ。

こんなおれだからこそ、なお一層、あの生き物に惹かれるのかも

しれない。ほとんどの人間が忌み嫌う、あの爬虫類に。

しかし、このような多分に屈折した、かなり他人への当てつけや皮肉の混在した、同病相憐れむ風情の鼻眞目、欲目を抜きにして、客観視してみても。

やはり蛇は愛すべき生き物だという結論に辿り着いてしまう。

あの無駄のない姿。

幾何学的な美しい模様。

うるさく鳴かないし、こちらの顔を窺って卑しく媚びたりもしない、あの潔さがいい。

それに。

彼らをよく思わない、よく知ろうとしない人々が神経質に喚くほどには、蛇は凶暴な生き物ではない。

十三の時、当時は別の名称で呼んでいた、その湖で出会った白子の蛇も、例外ではなかった。

当時。二百年前。

白い動物は神の使いだという迷信が、この地方では大手をふってまかり通っていた。

十三のおれは、感動のあまり身の内が震えた。

神聖なる霊が、おれの最も愛する形をなした器の中に宿っているのだ。

いや。

二百年を経て、少しは知恵がついた今のおれが、再びこのような白蛇に出くわしたとしても、言い知れぬ感動が全身を満たすのを止

める事はできないにちがいない。

おれは息をつめて白蛇を見守った。
脅かさぬよう、木陰でこっそりと。

脱皮は、上手く行っていなかった。
蛇は、ひどく難儀をしていた。
痛々しかった。

かなり辛抱強く見つめていたのだが、ついに我慢できなくなって、
木陰から姿を現すことにした。

蛇は、おれを見た。

瞬きを知らぬ、孤高の瞳で。

赤い瞳。

果て知らぬ虚無を孕んだ。

「こわがらないで。きみの手助けをしたいんだ」
人間相手には決して使わぬ、いたわりのこもった声音で、慎重に、
話しかけてみる。

「そつちへ行くよ。行くからね」

蛇は怯える様子を見せなかった。

警戒音も発しなかった。

言葉を理解したかのように。

蛇はおれの出現のために中断した行為を再開した。

しばし、それを観察した後、もつとも適切と思える部分の旧皮を、
そつと押さえつけてやる。

「これで少しは脱ぎやすくなったはずだよ、さあ、やってみて」

蛇は身をよじった。するすると抜けた。

これまでの経過から判断するに、ほとんど快拳だ。

おれは次々と位置を変えておさえ、蛇は身をくねらせ、そしてついに、脱皮は完了した。

新しいうろこの、きれいなこと。

白蛇といっても、真っ白ではなかった。

ところどころ黄金が染み出したような、微妙な光彩。

純白と、琥珀の、配置がまた絶妙。

おれは感嘆のため息を洩らし、蛇は高貴な鎌首をもたげ、湖水に姿を消した。

それ以来、白蛇を見かけたことはないが、いつかまた再会できはしないものかと、他の二箇所よりも頻繁に、湖に足を運んでいるという事実は、否めない。

湖を取り囲む木立の群に足を踏み入れるため、馬から降りる。そつと降りる。忍び足で歩く。

もしや、今日こそは、という再会への期待が、常にこのような動作を、おれに強いるのだ。

この慎重な足運びは、いつだって徒労に終始するのだが。
その日は、違っていた。

はじらう銀鈴のような繊細な水音が、足取りを凍りつかせる。

湖に視線を投じたとき、おれは足取りどころか心臓までも、うっかり硬直の餌食に差し出してしまうところだった。

あれは、何だ。

透き通るようなくなるぶしを、湖面に差し入れている、あれは。

無数の真珠を連ねたような白銀の髪が背をおおい、腰まで垂れかかっている。

どう解釈したらよいのだろう。

これは、あのときの蛇なのか。

本当に？

蛇の化身なのか。

そう信じていいのか？

動揺は、足に來た。

よろめいて、地面に落ちていた小枝を踏んでしまった。

かわいた音が、空気を震わせた。
白蛇の化身が、こちらを向いた。

赤い瞳。

虚無と深遠のまなざし。

あの頃と寸分たがわぬ。

「久しぶりだね、きみ」

おれはこう言った。

こう言っただけだった。

無垢な裸体をさらす、少女の姿をかりた蛇に。

だが実際は。

かすかに唇が震え、わずかに息が洩れただけで、言葉には、なかった。

白蛇の化身の、解き難い謎のような表情は変わらない。

しばらく彼女は、そのまなざしで、おれの両目と心臓を射抜いていたが。

やがて興味が失せたのか、ふいに視線をはずし、湖水に沈んでいった。

おれは、後ずさりを始めた。

そして、転がるように木立を抜けた。

ブランセットの手綱を掴み、飛び乗る。

驚いた彼は前足を上げた。

宥めることも失念し、ムチを食らわせてしまった。
たまらず彼は駆け出した。

どうしてこんな気分になるんだ。

なぜ逃げ出さなくてはならないんだ。

彼女の姿をただ一みみただけで、五体を駆け巡る血液が、油を注がれた火と化したようだ。

息ができない。心臓がやぶれてしまう。手の震えがとまらない。

精霊に会ったのなんか、初めてだ。

愚にもつかぬ噂話なら腐るほど耳にしたが、実際この目で見たことなんて、これまで一度もなかったのに。

しかし、この戦慄は、単に人外存在に遭遇したためばかりではない。

仮にあの精霊が、彼女のあの容姿よりわずかでも異なっていたならば、おれはこれほどまでも魂に深手を負わずにすんだはずだ。

おのれの心身を律することすらままならぬ恐慌に陥ったおれに、愛馬を氣遣う余裕はなかった。

プランセットは滅茶苦茶に引きずり回された。

突然の理不尽な扱いに混乱しながらも、賢明な彼は、ほとんど自力で、自分の意志だけで、城に帰還した。

002-001(前書き)

お久しぶりにもほどがあるってもんですが。
はづかしながら、いまさらながら、続きをば、
u p いたします。

まだこんなにも日の高いうちに、城内をうろつくの何ヶ月ぶりだろう。

近衛兵もうよういいるし、女官たちも活動している。

いや、夜だっていることはいるが、薄暗いから気にならないのだ。数は明らかに夜のほうが少ないし。

総天然色で立ち働く彼らの様子は、おれを落ち着かない気分にした。

ほとんどの者が、ものめずらしげにおれを見てゆく。

ごく儀礼的に、辞儀をするものもいる。

「イーダス王子だ」

「まあ珍しいこと、森の王子よ」

「あの方が？ わたし初めてお目にかかったわ」

「本当に、変わっていらっしゃる」

「なんだか、森の獣そのもののような」

「ええ、あの目つき、飢えた狼のよう」

「見つめられたら、すくみあがってしまいますわ、あたくし」

うるさい。うるさい。うるさい。

陰口のつもりか。丸聞こえだ。わざとなのか。

走り出したい。逃げ出したい。一刻も早く、この廊下から、自室へ。

だがそんな真似はしない。できない。

怯えたそぶりなど、だれが、こんな連中に。

物笑いの種になるくらいなら、忌避されたほうが遥かに益しと言
うものだ。

必死で平常心を取り繕い、だれもそこにいないかのように周囲を無視して、進む。

長い廊下を経て、ようやく自室へたどり着いたとき、それまでの苛立ちを扉へぶつけたのは、不覚。

ひとがいるとは思わなかった。

女中がひとり、清掃に従事していた。

脅かすつもりはなかった、などと。

不穏な物音を響かせた直後に、無意味。

女中は寝台の掛布を直そうと腰をかがめた格好で、固まった。

年頃は多少幼く見えるが、おれとそう大差ない。

視線は、こちらを向いたまま。

おれにも覚えがある。野犬に襲われたときだ。

本当に恐ろしいものからは、目が逸らせない。

不幸中の幸い、扉は開け放した状態。

おれはおもむろに扉から離れた。

壁に添って、移動する。

向こうが目を逸らせないならば、こちらが背けてやるしかない。

おれが目を伏せた隙を、小動物並みの敏捷さで捕らえ、女中は部屋から一目散。

女中は動転のあまり、無礼にも扉を閉めていなかった。

責める気はない。無理もない。

おれはみずからの手で、わが身を外界から遮断した。

002-001(後書き)

あまりにも長く放置していた罰か、原稿がまるまる1ページ紛失していました。

後半部分は、ほぼ即興です。

まだ続きます、いずれまた、お会いいたしましょう。

その夜。

憂鬱な晩餐の席に、おれは着いた。

「やあ、これは、わが親愛なる弟よ」

さっそく長兄が、ひやかした。

「久しく会わなかったけれど、元気にしていたかい？」

「おかげさまで」

おれは即刻、皮肉には皮肉を返す。

おれの動じぬ風情に、兄は鼻をならし、肩をすくめた。

十にも満たぬ子供の頃は、こいつとの三つの年の差は大きく、口先のみでさえ散々にやりこめられたものだが、近頃はおれだって、言うようになったのだ。

しかし、この兄など、まだ可愛げがあるとも言える。

気まぐれにせよ、あてつけにせよ、おれにちよっかいを出そうとするだけ、まだ。

弟や妹たちは、おれと口をきくのすら禁じられている。

それぞれの母親たちに。

二言三言、挨拶を交したとて、それでおれの赤毛が伝染する道理もあるまいに。

あの母親たちが、食事のとき、子供の傍らに陣取り、あれやこれやと世話をやく様子は、おれの胸を悪くさせる。

おれは、あんな扱いを受けたことがない。

甘ったるい練乳が、べったりと五体に纏わりついてきそうな、甲斐甲斐しくも鬱陶しい、あのような扱いは。

おれがまだ、スプーンもまともに使いなれぬ頃、しょつ中、粗相をしたが、そのときも給仕が、ただひたすら職業的に、おれの周りを片づけただけだった。

「……ごめんなさい」

その度に、下唇を噛み、赤面してうなだれ、羞恥のあまり半べそをかきながら、無作法を詫びなくてはならなかった。

が、何度謝罪の言葉を口にしても、おれが許されることはないのだった。

おれの胃は、きりきりと痛んだ。

料理の味は一切わからなかった。

野菜は紙を咀嚼するよう、肉は麻袋を食むようだった。

その頃のおれと同じくらいの小さな妹も、この席にいるのだが、彼女も昔のおれに負けなくらい、粗相の大盤振る舞いだ。

この座の主役……つまり、王も登場せず、まだ前菜も運ばれていないうちから、やんちゃのやりたい放題である。

しかし、当時のおれとちがうのは、彼女の母親がそれをかわいらしいと評し、周囲の者も調子を合わせているところだ。

昔のおれには、冷たい嫌悪のまなざししか、向けられたことはなかった。

あの刺々しい藪睨み、不快感剥き出しの舌打ち。忘れられない。

そういうわけでおれは、この差を見せつけられるのが嫌さに、夕食に間に合わぬよう、わざと遅く帰城することが多いのだ。

が、今日は昼日中から場内に居た。

逃げ隠れはできない。

いや、例えば仮病を使ったりとか、方法はないわけでもないが…
…まあ、たまには顔を見せてもよからう。ちょっとした嫌がらせに。

彼らと過ごす時間は、おれにはちっとも楽しいものではないが、その点について言えば、あちらさんたちの方がもっと楽しくないに相違ないからだ。

おもむろに、提示のファンファーレが鳴り響いた。

各々、席に着き、のんびりと閑談していた一族の間に緊張が走る。一斉に威儀を正して、さっと起立をした。

皆、食卓を離れ、扉のほうへ移動する。

衣擦れの音もせわしく、一列に並ぶ。

順番は、厳格に決められている。

戸口に近いほど、その地位は軽く、食卓に近づくにつれ、重くなつてゆくように並ぶのだ。

食卓の主賓席にもつとも近い場所に佇んでいるのは、長兄だ。

次は彼の生母、乳母、背後には彼らの世話係と護衛が複数つき従う。

乳母も世話係も、滅多に異動することはなく、王家の後継者が生まれた瞬間から、一個の核家族のように連れ添うのだ。

さて、その次はおれ一派だが。

おれのために横に並んでくれる親族はおらず、ただ後ろに、見知らぬ給仕が臨時についているだけだ。

おれには仮の核家族は存在しない。

正面の両開き扉が大きく左右に割れた。

王のおなりである。

精悍な面差しに口髭を蓄え、幅広な銀の王冠を広い額に乗せて。がっしりした背中を流れる直毛の金髪と共に、銀狐の毛皮の縁取りを施した紫紺のマントを鷹揚に翻しながら。

毛皮は献上品などではない。

王が自ら仕留めた、狩りの戦利品から作らせたものである。

五人の喇叭吹きが重厚な調べを高处から降り注ぐ中、王は四人の小姓を従えて上座へ向かう。

王の歩みに合わせ、列席者が順番に膝を折り、頭を垂れて敬意を払う。

「父上」

王が前方を通過しようとしたその時、末の弟は膝を折るかわりに、親しみを込めて呼びかけた。

変声期まえの、澄んだ声で。

敬愛の念を満面に表し、無邪気な誇りを薄青の両眼に輝かせ。

一点の翳りもない真っ直ぐな視線……王は歩調こそ緩めなかったが、一瞬、目を細め、まだ自分の腰のあたりまでしか背丈のない息子の頭に片手を置いた。

長さこそ不十分だが、その、天然の王冠さながらに光をはじく素直なプラチナブロンドを、クシャツと、鷲掴みにしたのだ。

弟は頬を紅潮させて、乱された髪を嬉しげに両手で撫でつけた。

母親が、まんざらでもなさそうに、髪を直すのを手伝ってやっている。

弟より六人、間をおいて、王がおれの目前にさしかかった。

おれは左手を右の胸に当て、膝を折り、頭を下げた。

王はおれの前を通り過ぎた。

おれは王の紫紺のマントが、暗灰色の縞模様が波打つ大理石の床を、ゆっくり這ってゆくを見送った。

おれたちは互いの存在を、形式に則って、じつに行儀良く、礼儀正しく……黙殺した。

王は上座に到着した。

そして、両手を広げて一同に着席の許可を与えた。皆、それに従った。おれも。

王みずからは、まだ立ったままで、告げた。

「今宵は今一人、余の食卓に着くべき人物が居る……来られよ」
王は、いまだ開かれたままの扉へ向けて、手を伸べた。

喇叭吹きたちは姿を消し、入れ替わりに、待機していた宮廷楽士たちが、優雅で軽快な弦楽四重奏を演奏しはじめていた。

王に招かれて広間に現れた者を見た途端、おれはみずからの心臓が、再び溶鉱炉と化すのを感じた。

息苦しさに耐えかねて、襟元に手をやり、タイを緩める。

なんと、あの白蛇の化身ではないか！

異国の、ゆったりした民族衣装の裳裾が、床を這う。

蛇の歩み、そのもののように、妖艶。

金糸の唐草模様を末端にあしらった、深紅の外衣。

真珠の巻き毛を頂く頭には、繊細な黄金細工のサークレットに、半透明な朱色の紗。

彼女は、差し伸べられた王の手にみずからの手を重ね、軽く腰をかがめた。

神秘的な身のこなし。見たこともない辞儀の作法。

王は一同を見下ろして言った。

「皆に紹介しよう。こちらは、はるか南方の国ナハシャよりの客人ノエル・ナハシャザーレ姫にあられる」

それから三日の間、おれは病氣になった。

病氣としか言いようがない。

仮病なんかではない。とんでもない。おれはたしかに病氣に罹ったのだ。

おれは……森へ行くことができなかった。

城を出ることができなかった。

これを病氣と言わずして、なんと言おう？

おれが……このおれが、森へ行きたくないと思うなんて！

原因はわかっている。

彼女のせいだ。

再会した時点で、おれははっきりと自覚した、みずからの初恋を。

おれは彼女の傍から、これ以上離れたくなかったのだ。

とは言っても、早とちりをしてはいけない。

おれが彼女の姿を拝めたのは、せいぜい一日一回、晚餐の席でだけで、決してべったり彼女にはりついていたわけではない。

人間嫌いで見栄っ張りのおれに、そんななりふりかまわぬ真似が
できよう筈もない。

おれは耳をぴんと尖らせ、彼女に関する情報を……ほとんどは、
情けなくもはしたないことに、宮廷人達からの盗み聞きなのだが……
仕入れようと努力した。

おれの気持は、かなり切羽詰っていた。

不毛の大地を彷徨う旅人が、飲み水の一滴でも渴望するように、

彼女のことをより多く知りたくてたまらなかった。

が、おれは素直にできていない。

おれの心中は、この魂の痛みは、だれにも悟られてはならないのだ。

誰にも！ 彼女にも！

他人に弱みを見せたらお終いだ、という強迫観念は根強かった。だから三日もかかったのだ。

例えば、彼女付きの女官の一人でも捉まえて、指輪のひとつも握らせることができたなら、事はもっと容易だったに違いない……ああ、おれにそんな芸当ができたなら！

このくだらない虚勢を、かなぐり捨てることができたなら！

実際おれは心の底から望んだものだが……それは魚に空を飛べという無理難題にも等しい……。

おれは苛々しながら、辛抱強くも三日かけて、彼女について二、三の事柄を知るに至った。

一、彼女は口をきかない。喋れないわけではないらしい。故国の因習により、他民族には声を聞かせてはならぬらしい。したがって、対話は筆談でおこなわれる……と言うことは、こちらの言葉は一応理解できると言うことだ。

一、南方民族の特徴である褐色の肌、黒髪、黒い瞳を彼女は持っていない。彼女は突然変異の白子であり、故国でも特別な（おそらく神聖な）扱いを受けていたらしい。

一、彼女はナハシャの差し出した、いわば人質で、近い将来、長兄の側室に……。

最後の事実は、おれを打ちのめした。

これを知った瞬間から、彼女と同じ敷地内で呼吸する喜びは、苦痛へと一変した。

三日目のことだった。

おれは城を出た。

四日ぶりに、森へ、還った。

なんということだ。

森は色あせていた。

まるで、よその地に踏み込んだようだ。

それとも。

森でなく、やはりこのおれの方が変わってしまったのか。

おれのこの目は、この皮膚は、恋に蝕まれ、曇ってしまったのか。おれは頂垂れて、つまりは愛馬のたてがみばかりを眺めながら、

しょんぼりと木々の間を彷徨った。

愛馬プランセットの歩むに任せていたおれは、彼が急に立ち止ま
ってしまっても、しばらく気づきもしなかった。

ようやく我に返って、のろのろと顔を上げる。

そして、ぎよっとした。

今の今まで胸の内で恋焦がれていたまさにその人が、目の前に佇
んでいたのだから。

彼女は今日も南方の民族衣装を纏っていた。

但し……男物を。

この地方の服よりは、袖口も襟ぐりもゆったり取った上着。

襟元からはハイネックの胴衣が覗く。

極彩色の紐やら金銀の鎖やら、贅沢というよりは無遠慮なほどの
大ぶりの宝石つきの金具などで、あちらこちらを複雑に止めつけて
あるところまでは女性のと同様だが……裾の丈が違う。

晩餐の時に見かける女物は地を這うほどたつぷりと布を使ってあ
るのに、今来ている服の裾からは、皮のブーツに覆われたふくらは

ぎまでが、覗いているのだ。

……たしかにあのドレスでは、森を散策するには不都合だろうが。

はじめは幻かと思った。

が、そうではなかった。

おれは非常に驚いた。嬉しい驚きではなかった。

彼女は兄の側女となる身なのだ。

「ここは、ぼくの森だ」

……そうだった。当時のおれは、みずからを『ぼく』と称し、そして。

「出て行きたまえよ」

……そして、今のおれならば絶対に使わないであろう、このような言葉を、生意気にも平気で、大真面目で操っていたのだ。

彼女は笑った。軽く鼻を鳴らし、唇を片方だけ吊り上げて。

「おまえの森？」

彼女は言った。たしかにこう言った。

喋った！

「おまえの父上の森だろう」

異邦人ならではの、微妙な発音。

それにこの尊大な言い回しは、どうだ。

このおれを……仮にもこの国の第二王子を『おまえ呼ばわり』したのだ！

言い返すこともできず、ただ目を瞠るばかりのおれを、彼女はまたもや、嘲笑った。

「わたしが口をきくのが、不思議か？」

逆らい難い、威厳に満ちた、口調。

「ああ、だってあなたは、あなたがた南方の人々は……」
気づいたときには、すでに返事をしていた。

語尾が流れたおれの言葉の続きを、彼女は淀みなく継いだ。

「他部族には決して声を聞かせない。声は神聖なもの。形もなく色もなく匂いもなく、そして……一旦発した声は、二度と取り返しはつかぬ。この喉元から迸り出て空中に溶け込み、何処かへ去る。我々は天の神々の元へ還るのだと信じているが……それゆえ、我らは不用意に声を出したり、聞かせたりはせぬ」

「では、何故、今……」

「我らは決して声を聞かせぬ。気を許せぬ者に対しては、決して」
彼女はきっぱりと言いつつ切った。

赤い瞳で、白蛇の瞳で、おれを見据えて。

おれは総毛立った。

「……が、どんなことにも例外はつきものだ。わたしとおまえのよ
うに」

彼女はひらりと、鋭い視線を上手に和らげて、言った。

「大人たちの言うことを、いちいち鵜呑みにしてはいけない。実際
あれらは、なにもわかつてはいないのだ。おまえの父親にしても、
そうだ」

「王が？」

「みずからの父を『王』と呼ぶのか？」

「……………」

「まあ、いい」

彼女は微笑んだ。

今度は嘲りを、あまり含んでいない。

心なしか、機嫌が良くなったようにさえ、見受けられる。

「そう『王が』な。彼はわたしの名すら、正確に公表しなかった」

「あなたは、ノエル・ナハシャザーレではないの？」

「厳密に言えば、ちがう」

「……………」

「……………」

少しだけ、沈黙が流れた。

彼女の、装飾をひとつも施していない真珠色のざんばらの髪が、風にそよいだ。

巻き毛が、さざ波のように泡立つさまに、一刹那、完全に目を奪われてしまったおれは、間抜けにも、咄嗟に呑み込めなかったのだ。彼女がおれの問いかけを待っていることを。

「……………あ、ええと、それでは、本当はなんていうの？」

おれは、幾分慌てて訪ねた。

彼女は、せっかく先刻ちらりと見せた微笑を、もう完全に引つ込めて、おれの鈍さを無表情で責めていた。

「ノエルタリア・ナハシャザーレ」

拗ねたように横を向いて、ぶつきらばうに言う。

「タリアとは王家の女子に与えられる称号だ。男子はタリオン。こちらの言葉で姫とか、王子とか言うが、それとは少し意味がちがう。名の一部なのだ。なくてはならぬものなのだ。おまえの『王』は、わたしをナハシャの人身御供と軽んじて、タリアの称号を省いたのかも知らぬが、それは誤りだ。わたしは今もノエルタリアだ。ノエルタリア・ナハシャザーレだ」

「……………ノエルタリア・ナハシャザーレ」

思わず反復してしまった。

彼女の表情は、まるで風紋だ。微妙に、繊細に、様子を変える。そしてどの表情も、おれを魅了し、釘付けにする。

彼女は、合格点をくれるときの教師のような、上機嫌だけれどやはりどこか高慢な顔をして、おれを見つめなおすと、いきなり気さくな雰囲気を醸し、言った。

まるで同性の、旧知の友のように。

「いいかげん、そこから降りてこないか？ 人を見上げて話するのは好きじゃない。わたしは砂だらけの国で生まれ育ったから、こういった環境が珍しくてならないのだ。おまえが馬から降りて、わたしと肩を並べて歩き、森を案内してくれるなら、わたしも、おまえの知らぬ、砂漠の話をしてやろう」

彼女は素直にものを頼む術を誰からも教わらなかったと見える。だが、この高飛車な物言いも、実に彼女らしくて、おれは気に入ってしまった。

安心も、した。

出会いが会いだったから、なんだかおれは、彼女のことを未だに人間以外のもののように感じていた。

けれど彼女は笑い、語り、拗ねてさえみせる、生身の人間だったのだ。

しかも、こんな風情を見せるのは、おれにだけ特別に、らしい。この考えに突き当たった途端。

おれは全身の細胞が歓喜に沸き返るような、すさまじい優越感を覚えた。

おれたちは、出し抜いているのだ。

欺いているのだ、周りのものすべてを。

おれたちの真の姿は、互いの他、誰も知らないのだ！

おれたちはそれから、毎日のように森で密会を重ねた。

ノエルタリアはよく喋った。

ここももち、危なげな発音と、例の高慢ちきな言い回しとで。

他の女がもしおれに、あんな態度をとったら絶対許せないが、彼女だけは特別だ。

彼女はおれよりふたつ上の十六で、おれと三つ違いの長兄より、ひとつ下だった……いや、兄のことを考えるのはよそう、あいつなんか、お呼びではない。

実際おれたちの会話の中で兄が話題にのぼったことなど、一度だっていないのだ。

おれが話すのはおもに、森の木々や、そこに棲む動物の種類など。彼女はそれに対する感想や、故国との比較について。

「南方には極端な二種の地しかない」
ノエルタリアは語る。

「砂漠と密林だ。

祖国ナハシヤは砂漠のほうを統べる大国だ。

大小およそ二十の部族を率いている。

首都は最大のオアシスによって潤われているが……おまえは三六〇度の黄土の地平線を見たことがあるか？ 砂、砂、砂。周囲には砂の他、なにもないのだ。都の外は、砂の支配下にある別世界だ。不毛の聖域だ……凄まじいぞ、あの風景は」

淡々とした語り口調。

あふれんばかりの水と緑の恩恵を蒙るレムノンの森の一角で、ノ

エルタリアの周りだけで、乾ききった砂漠の風が吹きすさんでいるかのような、臨場感。

「我らの刑罰のうちで、もつとも恐ろしいのは死刑ではない。追放なのだ。砂漠への追放……水も食糧も、灼熱の陽射しを遮るためのマントも持たされず、両手を切断され、目も潰されて。この宣告を受けた者は、たいがいその場で自害するな」

くくつ。

彼女は喉をならして笑った。

ああ、この赤い瞳、蒼白の頬には、獰猛この上ない嘲笑が、なんとよく似合うのだろう。

彼女の残酷さは罰当たりで罪作りで……たとえようもなく、妖艶だ。

「まったく、神々も酔狂なことをなさる。あのような地獄に、およそありとあらゆる宝石、輝石をばらまかれるとは。そうは思わないか、イーダス」

ノエルタリアの身を飾る、様々な色と形をなした宝石類が、誇らしげに輝きを放つ。

そして彼女の侮蔑の対象は……極刑を宣告された哀れな罪人から、おれたちレムノンはじめ、ここ西方の国々の浅ましさと、豹変した。

西方の国々と南方の国々との関係は、当時、微妙なところだった。南方の、砂漠の地下には膨大な数の宝石の原石が横たわり、密林の奥には無尽蔵の黄金が眠っているという。

おれたち西方の人間は、それらのものに憧れた。

しち面倒臭い外交や公正を軸とした取引などを経なくてはならないのも、もどかしいくらいに。

頭を下げて頼み込むのが、口惜しいほどに。

西方民族の多勢には、単に地形や気候に恵まれているので、その分生活に余裕が持てるだけなのに、なにを勘違いしてか『我々は文明人』『他の民族は未開人』と、一片の疑いもなく信じ込んでいる節があつた。

他人を見下すことによって、自己の優位を保とうとする、その卑しい根性が、同胞ながら、情けなく思えることが時折あつた。おれは蔑まれる側の痛みに、ことのほか敏感に反応してしまう。この境遇のせいで、とても他人事には思えなくて。

野蛮人。

金銀、宝石の産出国の住民を、西方人は陰でこう呼んだ。

それを耳にするたび、おれは彼らと同属なのが恥ずかしくなつた。南方人であるノエルタリアと出会う以前の頃からだ。

こいつらの軽蔑は、やつかみの裏返しであるのを肌身で感じたからだ。

『何故、あのような素晴らしい宝の数々が、野蛮人どもの支配下にあるのだ？』

『あの純粋な鉱物たちは、我々の手にあつてこそ、価値が生じるべきなのに』

『……自分たちのものにしたい』

『我々のほうが、あの輝かしい品々の持ち主にふさわしい』

『我々は、あらゆる点で彼らに勝っている……武力においても』

国交を始めた当初は、なんの不満もなかったのだが、さすがに長年、かれこれ八十年近くも続けていると、互いの国民性や国内事情にも、おのずと詳しくなってくる。

エゴもボロも、出てこようというもの。

ましてや、どんなに上辺の社交術をこらしても、南方の人々には通用しない。

南方人たちは会話による応対を、かなり厳しく制限されていたため、おのずと感応力が超人的なまでの発達を遂げていた。

取引相手のただならぬ雰囲気を感じ取るのに、長い時間はかからなかった。

『……力づくで来られたら、勝ち目はないかもしれない』

『自分たちのように、自然の猛威と戦う必要のない西方民族は、その余裕でもって、軍備にも力を注いでいるに相違ない』

南方人は当惑した。

一応、なけなしの理性と良心を振りしぼって邪な考えを抑えようと努力はしている西方民族以上に、困惑した。

そして、苦肉の策として、ノエルタリアの例の如く、人身御供を……差し出した。

すでに密林の帝国アシユバが、隣国ラストアデに大貴族の姫を二人送り込んだという情報も流れている。

ノエルタリアには、しかし、人質のしおらしさというものは、見受けられなかった。

おれといるときばかりではない。

城で、大勢の異邦人に囲まれていても、王の面前でさえも、彼女はその沈黙の威厳だけで他を圧し、その場に居合わせるすべての者の視線を制し、しかも心のうちには、何びとたりとも一步も踏み込ませはしないのだ。

「そんな不景気な顔をするな。また余計な気をまわしているな。わたしはただ、神々の気まぐれに対して同意を求めただけではないか

！ わたしの今の境遇は、おまえのせいではないだろう？ そうとも、おまえのあずかり知らぬことだ」

今度は、おれの無知無力無関心をなじられているような気分になつてしまった。

「なあ、頼むよ。どうしてわたしの言うことを、そついちいち曲げて取るんだ？」

ノエルタリアは自分の言い方が、いかに聞く者にシニカルな印象を与えるか、本当に気づいていないらしい。

断言するが、おれが特別ひがみつばいわけではない。

全然ひねていないと言えは嘘だが……まあ、あんたも彼女の言い草を彼女の声音、口調で聞いてみればわかることだ。

無理だろうけれど。

「よし、わかった。じゃあもうこの話はやめだ。真剣にキツネの巣穴を捜そう。今日中に、実物に会わせてくれるのだろう？」

ノエルタリアは自由自在だ。

険悪なムードを作り出すのも、ひらりとそれをかわすのも。

先程のように、残酷な話を平気で、どちらかと言うと嬉しそうに語るようなとんでもない悪女かと思えば、子供をなだめる母親のようにおれの機嫌をとる。

ふたつどころか、十も二十も年上の大人でも言うまいと思われる、冷めた意見を口に出すわりに、めずらしい動物などに向ける、恐れ知らずで好奇心旺盛な様子は、ひとり遊びに熱中する仔猫よりまだ可愛らしい。

おれはもうすぐ成人ということで、何人かの姫君と引き合わされたりもしていたが、ノエルタリアのようにおれを退屈させない姫は

いなかった。

退屈どころか、このおれを振り回し、かき乱し、ときめかせ……人間に対して無感動をとおしてきた、このおれを！

ノエルタリアにも同じことが言えたに違いなかった。彼女が人間らしい喜怒哀楽をみせるのは、おれに対してだけなのだ。

おれはこの世の最初の『男』の喜びを味わっていた。

森という、自然の恵みの結晶ともいうべき楽園の中にあつてさえ、埋めることの叶わなかった孤独を『女』によって、癒されたのだ。

おれは、おれたちは、互いの魂の半身を見いだした！

……けれども、それも、永く続く幸福ではなかった。

この点も、おれたちは最初の男と女に似ていた。

楽園追放の辛酸を、舐めるのも。

「ノエルタリア、何故……！」

ああ、おれは前にも同じことを口走った。

同じ思いで……絶望に閉ざされながら。

おれはノエルタリアと長兄の新床に踏み込んで、こう叫んでいた。
兄はベッドで、うつ伏せになっていた。

うす絹の天蓋に遮られているのでシルエットしか伺えないが、兄は確実に、死んでいた。

首の後ろに短剣をはやした人間が、生きていられるわけがない。

おそらく切っ先は、喉を突き破っているだろう。

純白だったシートが、朱に染まり始めていた。

「何故だ……ッ！」

おれとノエルタリアが親しいという噂は、やはりどこからか漏れていた。

それでも構わないと、おれは思っていた。

おれは変化した。

脱皮を済ませた蛇のように、おれの精神は、ひとまわり図太くなつたのである。

彼女と出会う前のおれは、虚栄だけは人一倍の見栄坊だった。

が、それは劣等感の裏返しに過ぎなかった。

けれど、ノエルタリアを知ったおれは、自分自身を信じることを覚えた。

文字通り、自信がついたのである。

あの、真に誇り高く美しい姫君がおれを、おれだけを、対等とみなし接してくれている……そのことによって、それまでのハリボテでしかなかったおれのプライドは、自信に裏打ちされた真実のものに……少なくとも、それに近づきつつあった。

周囲の雑音が、本心から気にならなくなったのだ。

がむしろに無視しようとするまでもなく。

それにまた、彼女も彼女で、おれと森で会うのを、別段だれにも言いふらしはしなかったが、と言って、逆に細心の注意を払ったり、こそこそしたりはしなかったのである。

『変わり者のひねくれ王子と、口をきかぬ異国の姫、か』

『お似合いではないか』

大半が、そう黙認してくれていた。
ところが兄は、面白くなかったらしい。

兄はもう十七で、正妻をとくに迎えていて、しかし子供はまだいなかったから、こんなにも慌しく側室を構える必要はまったくいはずだ。ノエルタリアには関心がない様子だったのに……それとも、彼女の近寄りがたい雰囲気には圧されて、手を出したくとも出せなかったのか……ともかく、おれに横取りされるのだけは、我慢ならなかったというわけだ。

兄はノエルタリアに、求婚した。

ノエルタリアは……いつものように黙して語らず、首を縦にも……横にも振らなかった。

横にも。

沈黙は、了解と取られた。

それでも彼女は、弁解もしなかった。

「何故だ、ノエルタリア！」

逆上したおれは、森の中でだけ自然に振舞おうという、暗黙の約束を破って、彼女の寝室に忍び込んだ。

そして彼女の腕を掴んで揺さぶり、オウムのように何度も同じ問いを繰り返した。

ノエルタリアは、なにも言わなかった。

なにも、言うてはくれなかった。

おれのなすがまなに揺さぶられながら、決してその心は、おれの思っままにはならなかった。

森のおれと城のおれとは、まったくの別人だと言わんばかりに、無表情で無抵抗で、おれのすべてを拒絶する。

そうこうするうち、不穏な気配を察した侍女がその場に踏み込んで、おれを見るなり金切り声を張り上げた。

おれは王により謹慎を申し渡され、三日後の今夜……ようやく軟禁状態からの脱走に成功したのだった。

胸騒ぎに突き動かされ、おれは兄と兄嫁の寝室に乱入し、そして……この惨状をまのあたりにしたのだ。

「おまえには……できなかった。おまえでさえも……」

炎を象った銀系の刺繍が裾から妖しく立ちのぼる、雪白の夜着。その胸から左肩にかけて、まだらに返り血を浴びたノエルタリアが、語りだす。

乾ききった金色の砂がこぼれ落ちるような、声で。

「おまえと初めて会った時、わたしは奇妙な感覚に捉われた。驚き、おそれ、ときめき……そして、とても懐かしかった。どうしてもうな。」

その時はそのまま離れたから、ただの気の迷い、一時の錯覚だと自分に言い聞かせた。

まあ、水浴びの最中に、おまえは突然現れ、あまつさえ、こちら
は全裸だった、当惑しても無理からぬ状況ではあったし、な。

けれど二度目に、城の広間でおまえを見かけた時……直系血族の
内で唯一、毛色の違っておまえと再会した時、今度こそわたしは確信
した。これは運命だと。わたしたちは同類だと」

そうだノエルタリア。

おれも確信した。

「……だが、おまえとの運命の出会いも、わたしの全生涯をかけた
誓いを、撤回するに及ばなかったのだ」

「誓い？」

「誓いと言うより……呪詛だな。これは、底無しの怨念だ」

ノエルタリアの瞳が、異様な光を帯びる。

背後を飾る鮮血……純白のシーツを染め上げてゆく兄の血潮より
もなお強烈な、紅。

「ナハシャもレムノンも、滅びてしまえば良いさ」

「ノエルタリア、どうしてそんなことを？」

あなたはナハシャの姫君ではないか、レムノンはともかく、なぜ
愛すべき祖国まで」

「愛すべき祖国？」

ノエルタリアは目をむいた。唇が、嘲りのために、引きゆがむ。

「わたしが祖国を愛しているって？ どこでそんなしあわせな誤解を？」

「だって……」

「ハッ！ わたしが故国でどのような扱いをされてきたか、おまえならわかってくれると考えたわたしが甘かったな！ わたしの受けた仕打ちは、おまえなどの比ではないわ！」

凄まじい憤怒の奔流。

ノエルタリア。

選ばれた聖女として、崇められているとばかり思っていたのに。

「……破壊神の申し子」

唐突に、激情の失せた声。顔つきも虚ろになる。

遠いまなざし……だが、燃えさかる深紅の瞳から怒りは去らない。皮肉な笑みに片頬が引きつる。

「わたしはずっと、そう呼ばれ続けていたのさ。国民すべてに。白は破壊神ズーシーの色なのでな。」

宮殿の最奥部、鉄格子つきの地下室で、首に鎖をつけられてわたしは育った。

僧どもが、片時も絶やすことなく部屋の周りで経文を唱え、魔除けの香を焚き染め……そうして、魔性の子供の放つ妖気を最小限に抑えたつもりでいたのだそうだ。

他の子供らは、母親の愛に満ちた子守歌で眠りにつくのだから？ わたしに降り注いできたのは、陰鬱な読経。わたしを呪う言霊の針。昼も夜も、絶え間なく。

それほどわたしが厭わしいなら、いつそ生を受けたその瞬間に、八つ裂きにしてくればよかったものを、誰もとどめを刺してくれないんだ。

迷信深い彼らは魔物の再来を、人の手で殺せるなどとは、考えられなかったらしいのだ。破壊神の申し子に直接手を下して、その報復を真正面から受けて立とうという英雄は、ついに何処からも名乗りをあげてこなかった。ゆえに……これが極めつけの話さ、わたしの召使いたちは、とても回転が早かった。六日以上使えた者は、ごく稀だ。そして、わたしのもとを去った者たちを待ち受ける未来は、ひとつの例外もなく、死のみだった。

死罪を宣告された極悪人どもが、処刑されるまでの間、わたしの身のまわりの世話をするきまりだったからだ。一般の、前途ある人間には、わたしの世話はさせられないとさ！ ははははは……」

彼女は身を折り曲げて笑い転げた。嗚咽にむせんで声が出なくなるまで。

「は……まったく笑わせる。わたしはただの子供だったのに。なんの力も持つてはいなかったのに。

だのに、わたしにあてがわれた連中ときたら……殺人鬼、暴行魔、放火魔、悪鬼羅刹に魑魅魍魎！ 世の矛盾と汚濁にまみれた彼らは、わたしのもとに送り込まれるということが何を意味するか、知っていた。もはや、余命いくばくもないのだと。

元気のなくなる奴は、まだましだった。やり場のない憎悪を、鎖につながれたわたしにぶつける者や、わたしを嚇して、なんとか『上』に助命を通そうと企む死に物狂いな輩よりは、はるかに。

わたしは、知恵と度胸とハツタリだけで、彼らに立ち向かうよりなかった。

並大抵のことではなかったよ。ひとすじ縄でいく連中ではないからな。あの連中を統率するのに較べたら、甘やかされ、敬われ続け

て肉のたるんだ、この国の王や王子を手玉に取るなど、まるで子供の遊びだったよ。話術ごとき弄さずとも、まなざしひとつで自由自在さ、おまえもよく知るとおり。

……話をナハシヤに戻そう。

わが愛すべき祖国の、罪もない一般大衆とその君主は、わたしに直接手出しはしなかった。

邪神の寵児の命運は、それ相応の穢れた罪人どもに委ねたと言うわけだ。

皆はわたしが、もともと信仰心が薄い上に、死を前にして自暴自棄になった悪党どもに消されることを切望しただろうが、あにはからんや、わたしはしぶとく生き延びた。あまたの危機を切り抜け、神経を研ぎ澄ませ、経験を積んで。

最終的にたどり着いたのは、カリスマだ。

彼らの死に対する恐怖を逆手にとって、利用したのさ。

破壊神の申し子、冥界への導き手を完璧に演じて、彼らに畏敬の念を抱かせた。

みずからの存在自体を、宗教にまで高めるのだ。

最初の一人を陥落させて、熱烈な崇拝者へと洗脳することに成功すれば、あとの者は比較的容易に支配できた。わたしは希代の名女優だったよ。死刑囚たちは、最期の救いをわたしに求め、わたしの足元にひれ伏し、わたしを崇め奉り、そしてわたしに赦されて、極悪人らしからぬ穏やかな表情で死出の旅路に着いていった。

こうしてわたしは長い長い間、地下の暗黒の皇女として、冥界の扉を玉座に君臨してきた。

はじめはたしかに、演技だったんだ。

けれど、いつしか……わからない。彼らがじつは正しかったのだ

ろうか？ わたしは本当に、生まれつき忌むべき存在だったのか……
…これが、おのれの本性なのかもしれないと、なかば本気で考え始めた頃……外界の奴らが、わたしを地下から出したんだ。

生まれて初めて対面した父親が、わたしに言ったと思う？

『西方の国へ旅立つように』

ただ一言！ しかも御簾ごしに！ わたしを直視すると高貴なその目が汚れるとも言わんばかりに。

わたしはピンときた。こいつらは……生まれて間もないわたしを、自分の子を泣き声がうるさいと絞殺した札付きの娼婦と共に牢獄へ押し込め、その後も次々と『超一流』の乳母やら教育係やらを送り込み続けてくれた、みずからの手を汚さずにわたしを葬ることを望んだ虫のよい卑怯者どもは、今もまた、手前勝手な都合で、わたしを弄ぼうとしていると。

わたしは無知ではなかった。

国際情勢に疎いわけでもなかった。

極悪人の死刑囚にも、情報通や頭の切れる者はごまんといたからだ。

そうとも、わたしはすぐに察しがついた。

わた祖国の君主と民衆が、暗黒の皇女を地下より引きずり出し、西方に派遣する、その理由を。

こうして、敵国に送り込んで、その国を滅ぼしてしまうためさ！
このわたし、災いの種、破壊神の化身の絶大なる邪力によって！

よし、いいだろう！

わたしはおまえたちの望みどおりの、期待以上の働きを示してやるう！

わたしはレムノン王家を砕く！　そしておまえたちをも、生かしてはおかぬ！　ともに惨めなる衰退の道を辿るがよいわ、おまえたちの信ずる、白き破壊神ズーシーの申し子の手にかかって！」

「ノエルタリア！」

耐え切れず、おれは叫んだ。

彼女の言葉を遮りたかった。とても最後まで大人しくは聞いていられなかった。

彼女の苦悩は、おれの苦悩なのだ。同情などという、なまやさしい代物ではなく。

「ひとつだけ答えてくれ、イーダス」

狂気から正気へ、彼女の精神は一瞬にして移行した。

「おまえは、どう思う？　白子に生まれついたのは、わたしの責任か？　この外見は、わたしのせいか？」

おれは、首を横に振った。

ゆっくり、そして、きつぱりと。

視線だけは、ためらいがちにすがりつくような、ノエルタリアの赤い瞳に据えたまま。

ノエルタリアは、力なく微笑した。

淋しげな笑み。

似合わないよ、ノエルタリア！

あなたは尊大でいなければ！

おれを、他のすべてを見下し、従わせていなければ！

「……おまえが、もつと早くにわたしの前に現れてくれたらよかったのに。わたしが本物の破壊神になってしまう前に」

ノエルタリアの夜着の裳裾が、青白く燃え上がった。

比喻ではない。

ほんとうに、炎が。

「ノエル……ノエルタリア！」

彼女を包み込んだ炎は、たちまち部屋中に広がった。

おれは彼女に向かって駆け出した。彼女を抱きしめるために。白い炎を、抱きしめるために。

苔むした廃墟の一角で、おれは目覚めた。

「ノエル……タリア……」

朦朧とする頭を振りながら、辺りを見回す。

勝ち誇るようにはびこる草木の群と、散在する瓦礫しか見出せない。

服はところどころ焦げていたが、身体はなんともなかった。

おれは立ち上がって歩き出した。

少し行くと、街並が見下ろせた。ここは小高い丘だったのだ。

急な場面転換に、ついていけない。

そのときは、よもや二百年という歳月を一拳に飛び越えてしまったなどとは、夢にも思ってみなかった。

おれの意識はまだ醒め切ってはならず、夢見心地の千鳥足で街へと下っていった。

白昼夢だろうか。それとも、あの世？

燦々と陽光の降り注ぐ広場は、人の往来が激しく、賑やかだった。

その内の一人に、ここは何処かと訊ねてみた。

数枚の絵を道端に置き、どうやらそれを商っているらしい、おれより五つ六つ年上の男に。

「レンタルさ」

男は、あっさりと答えた。

それにしても、ひどい訛りだ。

「けど、おめえ、なんてカッコしてんだ。どっかの戦災孤児かい？
およ、布地はけっこういいじゃん。どっから来たんだい、おのぼりさん」

レムノンだ、と答えると。

男は目を点にし、次におれの背中をどんどん叩いて笑い転げた。

「あはは、こりゃいいや。あんた時間旅行者かい。おのぼりさんにしちゃ、気の利いたジョークとばすじゃねえか、レムノンてのあ、二百年前のここの地名だぜ？」

今度はおれの目が点になった。

なにかタチの悪い物の怪に化かされてでもいるようだ。

現実感が抜け落ちているせいで、却っておれはパニックにも陥らず、不思議なくらい冷静だった。

このあたりに歴史書を置いている所はないかと、重ねて男に聞いてみた。

彼は図書館の所在地を、わざわざ地図まで書いて教えてくれた。

「かたじけない」

おれは……昔のおれはとんでもなく、育ちのよい坊ちゃんだったのだ。

いくら変わり者でも、一応、王子だったのだし。

だからおれは、ばかていねいにも深々と頭を下げて、こう礼を述べた。

相手は、ぽかんとしていた。

彼はおれが去った後、こう一人ごちたに違いない。

「なんだ、あのすまし返ったガキは」

図書館で、おれは貪るように歴史書を読んだ。

二百年の間には、文字も多少は変わる。読めない字が、いくつかあったが、知りたかったことは、大体、把握した。

……どうやら夢でも、化かされているのでも、ないらしい。

本にはレムノン王家の家計図も載っており、おれのことも、数行だが、ちゃんと書かれていた。

『イーダス・レムノスク』

最後の王ビアズレー九世の第二王子。

兄弟の内、唯一、赤毛で生まれたため、周囲から冷遇される。

一昔前、金髪以外の子が処刑されていた事実に較べれば、はるかに幸福であろうが、彼もやはり、迷信と偏見の犠牲者と言わねばなるまい……。

迷信と偏見の犠牲者。

ノエルタリア。

『わたしの受けた仕打ちは、おまえなどの比ではないわ！』
血を吐くような、あの叫び！

二百年も経ってしまったなんて。

おれはまだいい。おれなんかずっとましだ。

おれには少なくとも森があった。

のけ者にはされても、最低限の自由は保障されていた。
ところが彼女は…… ああ、かわいそうなおれの姫君！

あなたの望みは、叶えられたよ。

おれの兄弟は原因不明の出火で全員死に絶えたとある。

この本によると、兄弟たちは皆、それぞれの寝室でほぼ同時に火だるまと化したそうだ。

長兄の遺体に、焦げかけたナハシャ国紋章入りの短剣が刺さっているのを認めた王は怒り狂い、隣国に呼びかけて南方へ攻め入った。

あなたのしたことは、西方民族の物欲の火にも油を注いだ結果になったね、思惑どおりだろう？

ナハシャは滅び、レムノン王も帰国途中に病死した。

……レムノン王も。

どうして泣いている、イーダス。

ひとはいつか死ぬものだ。王でさえ、二百年も生きながらえはできぬのだ。おれのような例外中の例外でない限り。

なぜ泣くんのだ。

そうか、わかったぞ、おまえはただ、淋しいのだ。一人ぼっちで二百年も飛ばされてしまったから、不安なのだ。

別に王が恋しいとか、兄弟たちが哀れだとか……そんな筈はない！ 召使いも教師も従者も、おれにはいてもいなくても同じ、どうでもいい存在ではなかったのか？

還らぬ人々。時に吞まれていった人々。

おれをひとり、置き去りにして。

涙の一滴が、ホンの上に落ちた。おれは慌てて、袖口で拭いた。そして、ぎよっとなった。

涙は、王の挿絵の上に落ちたのだ。

おれは過去の、ある出来事を不意に思い出した。

些細なことだ。初めて閲兵式を見学させてもらった日。

その日は風が強かった。兵士たちが見事な行進を繰り広げている最中、おれの帽子が飛ばされて宙に舞い上がり、ちょうど上座に陣取っていた王の足元へ落下した。

王はおれを招いたがおれは動かず、すると王のほうが玉座を離れ、おれに近づいてきたのだ。

兵士たちは行進をやめた。

王はおれの頭に帽子を乗せ、今度こそ飛ばされぬよう、あごの下できちんと紐を結んでくれた。

その時おれのあごに触れた、大きくあたたかい手の感触を、こんな時になぜか、おれは……馬鹿らしい。たったこれだけのことを、今さら、思い起こして、ありがたがって……おれは。

「……父上」

手のひらにすっぱりおさまってしまう絵に向かい、おれは一言、つぶやいてみた。

二百年も、経ってから。

おれは、やっと、あなたをこう呼ぶことができたのです。

さて、おれは近代史にも目を通し、様々な情報を得た。

西方の国々はウエズスというひとつの連邦となっており、ばらばらだった王国の群は、共和制のもと、どうにかまとまっていた。

国々の首都であった大抵の場所には、国王のかわりに元首と呼ばれる、民衆の中から彼らの支持によって選ばれた者が、管轄区域を統治していた。

……が、結局のところ政治機構がどうなっていようと、今のおれにはあまり関係のないことだった。

それよりも切迫した問題は、とりあえず、この、空腹だ。

おれは愛には飢えて育ったが、食い物に飢えたことは、それまで一度もなかった。

飢餓とは、じつに、耐え難いものだ。

こんなにも、辛いものだったとは……。

なにかを手に入れるには貨幣が必要だ。それくらいは知っていた。そして、それは二百年後でも同じだった。貨幣の形は変わっていたけれど。

だが、あいにくとおれには持ち合わせがなかった。

生まれてこのかた、手にしたことがないのだ。

おれは図書館を出、ふらふらと街中をさまよった。

飢えて死ぬのは、とても辛かるう。今でさえ、こんなに辛いのだ。こと切れるまでどれくらいの間がかかるのか。

『こんな責め苦に苛まれるくらいならば、いつそ……！』

路地裏でへたりこんでいたおれは、決意を固めておもてを上げた。これ見よがしに腰に巾着をぶらさげている男に狙いをつけると、すぐさま行動に走った。

初めて働いた悪事は、ものの見事に失敗した。

「は、はなせ！ はなしたまえ！ ぶつぶ、無礼であろう、ひとの襟首をつかみあげるなど！」

おれは宙で足をばたばたさせて、見苦しくもがいた。

「けっ、なーにが無礼でい、このガキヤ、ほとんど私語のお上品言葉つかいやがつて。そんじゃ、お聞きしますがね、浮浪者のおぼっちゃま、他人のふところ狙うのは無礼とは言わないんで？」

おれとしたことが、空腹のあまり判断力が著しく低下していた。

巾着だけしか目に入らず、その持ち主が雲を突くような筋肉だるまの大男であるのを、てんで念頭に入れていなかった。

筋骨たくましい赤毛の（おれと同じだ）中年男は、片手でおれに顔を自分のと同じ高さにまで持ち上げ、不潔な髭面を思い切り近づけてこう怒鳴り、それからおれを地面に放り投げた。

「ったく、よりにもよってこのビアズレーさまの力ネを掠め取ろうとするなんてな。恐れ入ったぜ」

ビアズレー。

父王と同じ名だ。

おれの父と同じ名を持つこの男は、賞金稼ぎのならず者だった。彼はどんな気まぐれを起こしたのか、おれを拾った。

彼はおれを奴隷のようにこき使い、獵犬をしつけるように従わせ、ときには、特に酒を呑んでは、理由もなくおれを怒鳴ったり、殴ったりしたが、ごくたまには、おれのことをまるで実の息子みたいに可愛がったりもした。

おれはおれで、短絡的にも父と同名というだけで、この男に対して親近感を持つてしまい、多少理不尽な扱いをされても憎めず、また、時折、忘れた頃に不意に示される優しさなどにもほだされて、ずっと彼と一緒にいた。

恩人と、呼ぶべきだろうか。

とにかく、彼からひじょうにたくさんの事柄を学んだのだけは事実だ。

おれは、彼の指導のもと、一人前の無宿者の男がひと通り知るべきことは、あらかた体験できた。

酒、煙草、薬、女。

その他、身の守り方、ハッタリのかませ方、敵との微妙な駆け引きと確実な倒し方。正しい悪事の働き方。

戦場にも傭兵として赴き、もしも王子の肩書きを書いて特別待遇で出陣していたとしたら、ついぞ味わう機会がなかったであろう、この世の地獄というやつを、最前線であつぷりと堪能した。

また、あるときは二人でヤバイ組織を向こうにまわし、危ない橋も何度か渡った。

ボロい儲けに有頂天になったこともあるし、痛い目をみたことだ
って一度や二度の話ではない。

おれたちは呼吸の合ったコンビだったと思う。

互いに過去は口にせず、つねにこれから先、どうするかをだけ熱
心に語り合った。

その日暮らしに、いきあたりばったりの、ちゃらんぼらんでハチ
ヤメチャな未来を。

おれたちの微妙な主従関係は、時が経つにつれてますますあやふ
やになり、どっちが面倒みてるのか、世話やかせてるかわからなく
なり……そんなことさえ、だんだんどうでもよくなってきた……お
れたちは毛色も似通っていたから、はたから見たら、親子以外の何
者にも見えなかったに違いない。

四年間、そうして暮らした。

あちらこちらを、流れ流れて。

幕切れは、ビーズレーの死によって、だった。

そのことについては、ふれたくない。

ふたたびおれは、虚しさに包まれた。

ノエルタリア。

孤独になると、彼女のことを脳裏を占める。

考えてしまう、どうしても。

あの賑やかな道連れといると、いやでも面倒事が次から次へと降って湧くので、センチになるヒマもなかったのだが。

狂気にかられるまま、一時おれはわざと、命知らずな真似を何度かやってみたが死ねなかった。

こうなると強運なんだか凶運なんだか。

つまらなくなっておれは、無謀な行為をやめた。
理性が戻ったのだ。

ノエルタリア。

あの時のおれは、本当に無知なガキだった。
でも今は……今のおれなら、もしかしたら。

ノエルタリア。

ばかげた考えかもしれない。でも、ありえないことじゃない。

二百年のときを超えることがでたのなら……もしかしたら、遡ることだって！

いつか、そのうち、なにかのきっかけで！

今のおれになら、できるかもしれない。

状況をくつがえすことが。

あなたを救うことが。

一縷の望みを心に灯して、おれは生きることにした。

この、付録の人生を。

「ちつくしょおつ、なんてことしてくれやがったんだ、このアマ！」
港町の喧騒のなかに、ひととき大きな濁声が響いた。

おれは旅の途中だった。

レムノンへ、もとい、レンタルへ還るのだ。

理由は単純、時空をゆがめるあの怪現象を待つためだ。

どういう原理であんなことが起きたのか、いまだに理解に苦しむ
点が多々あるのだが、とりあえず『あの場所』に近いところに居た
方がよいのではと、ふと思ったからだ。

確たる証拠もない、思い込みの結論なので、旅路も別段急いでは
いなかった。

また、四年に渡る無計画無鉄砲無節操な生活が、すっかり板につ
いてもいたので、旅費も旅程も、実に、ずさんであった。

路銀が尽きればその土地で日雇い仕事などをして稼ぐ。

おれは賭け事にけっこう強いので（なにをかくそう、師匠のピア
ズレーより上手かった）スズメの涙の賃金を、何倍にも膨らませる
のが得意の裏技だ。

今日も今日とて、カードでちょっとばかりダーティな手を使って
儲け、宿屋兼酒場に引き上げようとしているところだ。

夏の日にさらされ、汗みずくになって肉体労働に従事した後、デ
リケートな頭脳プレイをやったのけたのだ。

おれはささやかな勝利間に酔いしれながら、ようやく涼しさをは
らんできた夕風を心地よく受け止めつつ、したたかで活気に満ちた

群集の流れに身を投じた、まさにそのときのことだった。

前述のわめき声に続いて、鞭のうなる音。

「あ、兄貴、鞭はやバイよ、傷がついちまう」

「ばかやろう、こいつはもう売り物にやらねえんだよ！ 見てみる、この顔、腕、胸、肩！ 滅多にいねえ上玉だから、手もつけねえで個室まであてがってやったのに、どこで手に入れやがったか、ガラスの切っ先でためえの身体、切り刻みやがてよ……こうなりやもう、遠慮なんかしてやる事はねえ！」

「だ、だけどよお、兄貴……」

「うるせえんだよ、ためえは！ ……あつ、待ちやがれ！」

おれは別に、こんな会話を聞きたかったわけではない。

いやでも背後から耳に飛び込んでくるのだ。

奴隷船の着くところ、奴隷商人は必ずおり、酷い扱いを受ける奴隷もまた、どこにでもいるので、おれは氣にとめなかった。

おれには関係のないことだ。

「奴隷が逃げた！ だれかその女をつかまえてくれ！」

声とほぼ同時に、おれに身体にぶつかるものがあつた。

反射的に、おれはそいつを、つい捕らえてしまった。

チヨコレート色の肌。なめらかな肩に垂れかかる黒葡萄の房。ア

ーモンド型の黒い瞳。

驚きと怖れ、怯えと絶望。

手負いの獣の、いかがわしいまでに妖美な面差し、その魅力。

ボロ雑巾とみまごうばまりの、粗末な麻の単衣だけを、豊満かつ、しなやかな肉体にまとい、いたるところから熱い血潮をしたたらせ。

われとわが身を、切り刻んだか。

痛々しいほどのこの矜持は、おれに、かの人を思い起こさせた。そういえば年恰好も、あの頃のノエルタリアと同じくらいだ。

王女と奴隷。

まったく対照的であるのに、身分も、外見も。

「ありがてえ！ あんた、離さないでくれよ！ 頼むぜ！」

人買いが追いすがってきた。娘はもがいた。が、おれは力を緩めなかった。

娘は最後の手段とばかり、おれの手首に噛みついた。

おれはフェミニストではない。

自由なもう一方の手で、娘の横っ面を、腹立ちにまかせて、張り飛ばした。

娘は炉用に倒れこみ、動かなくなった。

気絶したらしい。

品のない愛想笑いをおれに向けた後、さっそく娘に手をかけようとする人買いに、おれは金貨を二、三枚放ってやった。

「傷物の奴隷女には、多すぎる位だろう」

人さらいはなにか言い返そうとしたが、おれの顔を見ると、言葉を飲み下した。

密林の娘……か。

「さようで、だんな。南方美女の典型ですぜ。ちっとばかり肌にひつかき傷こさえちまつたが、なに、ホンのちよびつとで……」

おれを「あんた」から「だんな」に格上げた奴隷商人のいやらしい猫なで声を思い出しながら、借り部屋の寢床に横たわる、すりとした肢体を眺めやる。

南方美人の典型。これが。

ああ、それではノエルタリアは。

かの地では、さぞや奇異に見えたことだろう。

あの透きとおる肌、真珠を連ねたような銀髪、鮮血の色の瞳を持った、あの姫君は。

おれも、典型という言葉には劣等感を持つ身である。

おれはこの典型美女に、ちよつとした嫌がらせを試みた。

港でおれの一撃をくらってから、彼女は目を覚まさない。おれのなすがままだ。

今のうちに傷の手当をすませてしまえば事は簡単だが……おれはわざわざ、気つけの酒を彼女に飲ませたのだ。口移しで。

「よう、べっぴんさん。おれを憶えているか？」

朦朧と薄目をあけた彼女は、おれと至近距離で対面した途端、力ツと目を見開いた。

咄嗟におれを突き飛ばし、肩で呼吸しながらも反抗的なまなざし。ぞくぞくするぜ。

おれは鷹揚な動作でベッドを離れ、余裕の笑みさえ浮かべて娘に近づいたが……。

「こら、ちつとは大人しくしろ、手当てできないじゃないか！ その切り傷の山、一生背負って歩くつもりかおまえは！」

密林出身の美女の暴れること暴れること、噛み付くわ蹴飛ばすわ引っかくわ……おれは、自分の悪戯心を、深く激しく、後悔した。

大袈裟な出血のわりに、傷口は幸いにして、どれも浅く、あとあとまでくつきり残りそうなものは、ほとんどなさそうだった。

おれに対する第一印象が、とんでもなく悪かったせいも手伝って、彼女はすさまじい抵抗を繰り広げたが、決して大声で喚いたりしなかった。

「沈黙の掟、神々への忠誠の証、か。呆れたな。おまえたち南方民族は未だにそうなのか。無学な者は……あの人買いなどは、おまえたちを、言葉もろくに操れぬ低級蛮族と蔑んでいるのだぞ。他国者の蔑視より、神々に背くことのほうが恐ろしいとでも、よもや本気で考えているのか？」

やっと戦争を終えて、窓辺で一服するおれに、寢床で悔し涙にむせんでいた褐色の娘は、射るような視線を投げてよこした。

やっぱりだ。

低級蛮族どころか、なんという頭脳か。この娘は異国の……おれの操る言語を完璧に理解している。

おれが彼女の故郷の因習を知っているのを、あからさまに訝しんでいた。そして、おれの質問に対しては。

『アタリマエダ！』

強い光を失わぬ黒曜石の両眼が、きつぱりところ答えていた。

おれは小馬鹿にしたように鼻を鳴らし、煙草をもみ消して、部屋を出た。

夕食をすませ、一杯ひっかけ、もう一人分の食糧も適当にみつくるって部屋へ戻れば。

密林の美女、おれの奴隷は、おれのベッドですやすやと眠りこけていた。

月明かりに映える、あどけなく安らかな寝顔。

それをまのあたりにして我知らず和んでしまったおのれに気づき、おれは面食らった。

こんな気持は、あの時以来だ。

ノエルタリアと森で過ごした、理屈抜きの、史上のひととき以来。

おれはむかつ腹を立てた。ノエルタリア以外の女に心を動かした自分に。

おれをこんな気分にした、この密林の娘に。

だからおれは、わざと乱暴にシーツを跳ね除け、強引に寢床へもぐりこんだ。

娘は当然、目を覚ました。

悲鳴を上げかけ、すんでのところで押しとどまり、慌ててベッドから飛び出した。

暗がりの中で、なにかにつまずいたらしい。

派手な音を立てて、娘は床に転がった。

ずるずると這いずり、壁面までたどり着くと、背中をそこに貼りつけて、こちらを向く。

咎めるように黒光りする、アーモンドアイ。

「……なんだその目は」

おれは不機嫌に、彼女を睨みつける。

「いいか、ここはおれが借りた部屋だ。汚い売春宿の一室だが、ともかく今夜はおれの寝ぐらなんだ。おれがおれの金で手に入れたベッドに、おれが寝てなにが悪い」

おれは一気にまくしたてた。

娘は下唇を噛み、瞬きをしながら、悔しそうに目をそらした。

おれは深呼吸で息を整え、いくらか落ち着いた声で続けた。

「……食い物は、そのテーブルだ。食いたきゃ食いな。それともひとつ、おれが気に入らないんなら、逃げたってかまわないぜ。ドアの鍵は、ここだ。が、これだけは言っとく。当分の間、傷口は清潔に保つとけよ。もし、ここに居つきたければ、飯盛り女として働かせてもらえるよう、女将に口きいてやってもいい……まあ、好きにするがいいさ」

言うだけ言うと、おれはベッドにひっくり還った。

けれどなかなか寝付かれず、苛立ちもあらわな寝返りを、幾度となく、繰り返した。

「ついてくるな！ おまえを拾ったのはただのなりゆきだ、ものはずみだ、ほんの気まぐれだったんだ！」

ほとんどまる一日、おれの後ろをすたすたついてくる娘を、おれは意地になって無視し続けていたのだが、ついに耐え切れなくなつて、くるりと背後に向き直り、怒鳴った。

怒鳴ってから気がついた。

おれはかつて、そっくり同じセリフを同じように怒鳴られた覚えがある。

ビズレーに。

「……くそつたれが」

誰にともなく、吐き捨てる。

娘は平然とおれを見返している。

『好キニシロト言ツタ。ダカラ好キニシテイル。ツイテユク』

目が、そう語っていた。

豊かな表情……言葉よりも雄弁な瞳。

この娘は癪に障る。気に食わない。

たった一人の姫君のために捧げた、おれの心の最も大事な部分さえ、無遠慮にさらってゆかれそうなおそろべき予感が、胸の内に吹きすさぶ。

足取りも荒く、再びおれは歩き出した。

おれは聖人君子ではない。

男の生理的欲求の赴くまま、商売女を相手にしたことも、正直言

って、何度か、ある。

しかし、おれが彼女たちに求めるものは、単に一時の快樂のみで、決してそれ以上でも以下でもなかった。

楽しませてくれた礼はたっぷりはずんでやったし、変な趣味もないので無理も要求しない。

おれはマナーも金離れも申し分ない上客として、彼女たちの間では評判がよかった。

おれはそのことに対して、ノエルタリアに後ろめたさを感じたりしたことは、あまりなかった。

仮にノエルタリアが男で、おれが女であつたなら、もっと深い罪の意識に苛まれたかもしれないが……例外はもちろんあるだろうけれど、これが男女の構造の違いではないかと、おれは考えている。

ずるい男の、言い訳だろうか。

とにかくおれは、他人に誇れるほどには、身持ちのよいほうではないのである。

今さら気取るガラでもないのに、それが……この娘に対してだけは。

畏れに近い、尊重の念。

これまでノエルタリアにしか抱くことのなかった慄きを、どうして、ゆきずりの奴隷女ふぜいに感じなければならぬのだ。

なんとか理性で片付けようとしたが、理性では明らかに、役不足だった。

……もういい！

おれは論理に頼るのをやめた。この娘と別れよう。物理的に距離を置くのだ。

そうすればこんな気持を、もてあまさなくて済む。

ところがいくら無視しても、こうしてあからさまに追い払っても、娘はおれから離れようとしなない。

何故だ。

おれは彼女に好かれるようなことをしてやった記憶はない。それどころか嫌がることばかり、わざとのようにやらかしてきたのに。

頼むから、どこかへ消えてしまってくれ。

おれはおまえに、心を奪われてやるわけにはいかないのだ。

いつしかおれは、迷路のような路地裏を、足早に駆けずりまわっていた。

娘は懸命についてこようとする。

が、おれを見失うまいと必死になるあまり、周囲への注意力が損なわれていたのだろう、彼女はそこらにたむろしていた男たちの人に、ぶつかってしまった。

巖のような大男が五、六人、わらわらと娘に群がった。

えげつない言葉で獲物を値踏みする下衆どもの間から、潤んだ大きな瞳がおれにすがりつく。

咄嗟にそちらに目を走らせたおれは、彼女以上に困惑した表情を浮かべていたに違いない。

あきれ返つてもものが言えない。

こんな時でさえ、沈黙の掟を守るのか、この女は！

おれは彼女のまなざしを振り切った。振り切つて、歩き出した。好都合じゃないか。

あの娘は、もう追つてこられない。

だが。

せいぜい頑張ってみても、五十八歩が前進の限界だった。
それ以上、足が前に動かないのだ。

「……畜生、なんだっておれが！」

おれは絶叫し、きびすを返してダッシュした。

おれの奴隷女は、危ないところだった。

危機一髪だった。

おれは、かなりハードな立ち回りを演じて、男どもを、のした。

おれは壁にもたれ、娘を睨みつけた。

荒い呼吸がおさまるまで待ちきれず、大口をあけて、罵った。

「おまえ！　さらわれたり犯されたりは、おれの目の届かないところでやってくれ！」

無茶を言う。わかってる。

しかしこれが、まぎれもない本音だった。

密林の娘は、どこかうわの空というか、陶然とした面持ちでおれをじっと見守っていたが、おれの罵声を浴びると、いつもの豊かな表情が、見る間に甦ってきた。

泣きそうな笑顔、いや、嬉しそうな泣きべそ顔と言ったほうが近い。

駄目だ。ついに捕まってしまった。

「……名まえ、なに？」

はじめて口をきいた、おれに！

おれは驚いた。

度肝を抜かれたと言っても大袈裟ではない。

こいつの声、忘れもしない、この声は。

ノエルタリアの。

「……なに？」

おれが答えないので、娘は再度、訊ねた。
今度はおれの顔を、覗き込んで。

「イーダス」

おれは、自分の声が震えるのを、抑えることができなかった。
娘はおれの名を鸚鵡返しにつぶやくと、つぼみが花開くように微笑んだ。

「……おまえを、なんて呼べばいい？」

おれたちは宿をとった。二人で、一部屋。

「あなたが、つけて」

娘は悪びれず、こう言った。

「では……ノエル」

これしか思いつかない。

おれの愛する女の名は、これでなければ。

「ノエルと呼んでいいか」

「かまわない」

かまわない、か。

おれは苦笑した。奴隷らしからぬ、生意気な口のききようだ。それがまた似合うのだ、ノエルタリアの、この声には。

その夜、おれの奴隷女は、おれの女になった。

『イーダス。イーダス・レムノスク』

「う……なに、なんだ、ノエル？」

夢うつつの中で、おれは返事をした。

が、ただちに、水をかけられたかのように目を覚ました。

ノエルはおれのフルネームを知らないはずだ！

おれは飛び起きた。

「ノエル……！」

となりで眠るノエル。安らかな寝顔。横たわる彼女の頭上に。

『久しぶりだな、イーダス・レムノスク』

まぼろしのノエルタリア。

青白い炎の衣装。翻る銀系のアラベスク。

まさしく、ノエルタリア！

『待っていたのだ、この日が巡り来たるのを』

次にノエルタリアは、おそろしいことを口にした。

平然と、いかにも彼女らしく。

『この娘を絞め殺せ、イーダス。ああ、指を使っではいけないぞ、紐も駄目だ、あとがつくからな。こう、腕を巻きつけて、ゆっくり静かに窒息させるのだ。あやまって首をへし折らぬよう、気をつけてな』

「ノエルタリア！ どうして、そんな……」

『この身体をわたしが乗っ取ってしまうために決まっているだろう』

！ 二百年の時を経て、わたしは再びこの世に生まれ変わってきた。この娘の内に潜み、じつと機会をうかがっていた。わたしは賭けたのだ、おまえとわたしの運命に！ わたしたちの絆の強さに！ 同じ世界に同じ時期、二人が存在していさえすれば、わたしたちは必ず出会い、惹かれあうに違いないと確信していた。そして、それが今まさに現実と化したというわけだ』

歡喜に燃え輝く、紅玉の瞳。

「……ノエルタリア。この身体を乗っ取って、どうするつもりなんだ？」

できる限り、冷静な声を絞り出す。

ノエルタリアは楽しげに答えた。

『知れたこと。南方民族どもに、とどめを刺すのだ。全滅させてやるうと思つたのに、この前は達成できなかったからな。無論、手伝つてくれるのだろうか？ わが運命の半身よ。わたしのこと、破壊神としての魔力は、すべておまえと分かち合おう。二人でこの世を支配するのだ。そうして、世界に報復してやろう。わたしたちを異端者として迫害した、この世のすべてのものに』

おれの胸は、悲しみに塞がれた。

かわいそうなノエルタリア。尊大で哀れな、おれの姫君よ。

あなたは、なにも変わっていない。

二百年の時を経ても、なにも。

仕方がない。だってあなたは、死んでいた。二百年間、ずっと。

ところがおれは、生き続けている。生きているということは、変わり続けるということだ、刻一刻と。成長し、ある時点からは、老い始め。

生きている人間は、死者のようには、いつまでも、ひとつの感情、たとえば憎しみなどに凝り固まっては、いられないんだ。

様々な経験をして、狭かった視点、幼かった自分を振り返ったりして。

『さあ、手始めにこの娘からだ。この娘の精神を、身体から追放するのだ。この娘の魂を、永劫の闇に葬れ！』

「……できないよ、ノエルタリア」

赤い瞳が、驚愕に見開かれる。

『何だと？』

「あなたはそんなこと、ちっとも望んではないから」

彼女の目つきが、凄みを増した。

二百年余の怨念が炎上する暗黒の王女の両眼。圧倒されぬ者が、いるだろうか？

けれどおれは、怯まずに続けた。

「ぼくは今でも憶えているよ。忘れられるものか」

おれの口調は、昔に戻っていた。

「あの夜。兄の返り血に染まりながら、あなたの唇から漏れたつぶやき……『おまえには、できなかった、おまえでさえも……』ぼくはずっと考えてた。あなたのために、考えてきた。あなたは……止めてほしかったんだ。ぼくに止めてほしかったんだ。本当はあんなこと、したくなかったんだ！」

彼女の白い顔に、同様の色がよぎった。そして、次の瞬間、無表情に。

紙のように、蠟のように、無表情に。

「ノエルタリア！ あの頃ぼくはあまりにも無知だった、子供だっ

た。あなたは全身で叫んでいたのに。止めてくれ、だれかわたしを止めてくれ、イーダス！

……だのに、ぼくは。

あなたが必要としていたのは、あなたの意のままに動き、頷くばかりの、人形のような少年ではなかった。あなたの過ちに異を唱え、叱責し、正しい方向へ導いてゆける強さを持った男だったのに、なのに……あの頃のぼくは、まぎれもなく前者で、あなたに嫌われることこそが、他のなによりおそろしかった。

ぼくのこの弱さが、自信のなさ、あなたとあなたの祖国、そしてぼくの国をも滅ぼしてしまったのだ！ この結論に達したときの、ぼくの苦悩が想像できるかい？

……だから。

こうしていつかまた、あなたと奇跡的に会うことができたなら、二度と同じ失敗だけは繰り返すまいと心に誓った。

ノエルタリア。今のぼくは……今のおれは、昔の『ぼく』ではない。ぼくが言っただけであつたことを、おれが言つよ。

ノエルタリア。

自由になつてくれ。

その妄執から、憎しみから、自分自身を解き放つてくれ。

あなたを縛る、内なる地獄から抜け出してほしい。

世界の王になんか、ならなくてもいいんだ。

あなたの魂の平安だけを、おれはいつも、願っているから。

あなたがそうであるならば、それだけでおれは、充分幸福でいられるのだから……」

ノエルタリアは無表情を崩さなかった。

崩さずに、おれに近づき、そして、おれの唇に、みずからの唇を重ねた。

『……それでこそ、おまえだ。わが半身、イーダス・レムノスク』
おれの耳元に、こうささやきを残し、まぼろしのノエルタリアは、まぼろしの邦に去った。

おれの両目から、大粒の涙がこぼれた。あとから、あとから、とめどなく。

ノエルタリアは素直な物言いを決してしない。
『それでこそ、おまえだ』これは言い換えると『ありがとう』という意味だ。

「ノエル……おれは……」

おれは、まちがっていなかったのだ。これでよかったのだ。

ノエルタリアの一言は、おれを強くした。

おれを、生まれ変わらせた。

生きながらにして。

終

「ノエル」

「ん……？」

「故国に、帰りたくはないか？」

突然のおれの問いかけに、おれの腕の中でまだ、うつらうつらしていたノエルが、すっかり意識を取り戻す。

おれの顔を間近で見返して、ノエルは慎重に答えた。

「それは、帰りたいに決まっている。でも、今のあそこは、とても危ない」

「おれと一緒にでもか？」

朝を告げる小鳥たちの声が、二人の沈黙の間、部屋に響いた。

「……どういうこと。連れて帰って、くれるの？」

「そう。そしておれは、おまえとともに、そこに住み、南方の地に平和を取り戻すべく働きたい……ノエル、おれは」

前世のおまえもだが。

「かの地の人々に、大変な負い目があるんだよ。今までのおれには勇気がなかったから、その事実から目をそらしてばかりいた。おれには関係ない、仕方ないだろう、おれ一人の力では、どうにもならない問題なんだってな……卑怯者もいいとこだ。」

こんなちっぽけな人間に、どれほどのことができるかは、わからない。なにもできないかもしれない。けれどおれは、やってみたいんだ。やらなくてはならないんだ、今のおれにできる限りのことを、精一杯。

ノエル、だがそのためには、おまえの協力が、ぜひ必要だ。

例のあの、沈黙の掟だけどね……まずあれを、なんとかしなくてはと思うんだ」

ノエルは身をこわばらせた。

「太古の昔は、それでよかったのだろう、けれども時代は変わった。慣習の異なる民族との交流も、盛んになってきた。なのに南方民たちがあのままでは……ノエル、わかるだろう？ この手の説得は、他国者のおれには、おれだけでは絶対に不可能なんだ」

「……そんなことをしたら、追われてしまっ、わたしたち。西方と南方の、ふたつに」

「最悪の場合、そうなるかもしれない。でも、ノエル、現在南方の受けている迫害は、正しいことだと思うか、おまえは」

彼女は首を、激しく横に振った。

「間違ったことには異議を唱えたいんだ、おれは。世界中を敵にまわしても」

おれは昨日まで、おのれの数奇な運命に対して、なんの意味も見いだすことができなかった。意味どころか、ただ不満だけだったんだ。が、今はちがう。この時代、この瞬間に生きて動いている理由がはっきりわかる。

おれはチャンスを与えられたんだ。本来ならば来世で償うべき業を、他ならぬ自分自身のこの手で、もしかしたら改善できるかもしれない……これは稀有な恩寵だ。感謝の念さえ抱いているよ。そうと悟ったからには……これ以上流されて生きていたくない」

おれはノエルの髪を撫でた。

「おまえがいるから、おれはこんな大それた決心をすることができた。おれと一緒に立ち上がってくれないか、おれたち自身のために人間が始めた過ちだ、人間に正せないはずがない。おれはそう信

じたい。たとえおれの手では実現できなかったとしても、あとに続くだけかが、いつか、きつと……そうとも、困難なのは百も承知だ。たかがおれの一生で達成できるなどと、安易な樂觀はしていない。だからこそ、そのためにも、だれかに継いでもらうためにも、今、明日でも明後日でもない、今、すぐに始めたいんだ……」

ノエルはおれの話、真剣な面持ちで聞いていた。
おれは一旦、言葉を切って、彼女の反応を待った。
やおら、彼女はおれに接吻し、そして……こうささやいた。
「それでこそ、おまえだ、イーダス・レムノスク」

おれは仰天して、ノエルを見つめ返した。
「おまえ、どうして……まさか……ノエルタリア？」
「え？」

おれに負けず劣らずの、びっくりまなこ。
ノエル自身も、戸惑っているのだ。

「そうか……は、はははは」
そうだ。ノエルもノエルタリアも、わざわざ区別する必要はないのだ。

二人とも、おれの愛する、ひとりの女なのだから。

『マリッサ・ノエル、エレ・ノエル』

二百年前に少しだけ教わった、ナハシャの言葉を心の中でつぶやいてみる。

『はるかなるノエル、そして身近にいる、もうひとりのノエル……』

終（後書き）

このお話は、これで終わりです。最後までありがとうございました。

後日、目次を改変して、もっとちゃんとしたあとがきを書こうかなと考えちゅうです。

とにかく今は、ちょっと疲れてて^^；

じつは外伝もあります。近日公開予定です。よかつたらまた読みにきてください。

- - - - -

というわけで、後日です。

目次改変は、挫折しました……。

もっとちゃんとした、あとがきは……やっぱ、無理かも。

タイトルの意味は、最後まで読んでもらうとわかるしかけになっていますが、直訳するとこれ「遠くのノエル、近くのノエル」と、なります。

しかし直訳だとあまりにも愛想がないので、ラスト、カッコつけさせてもらいました。

で、外伝はほんとにあります。

鋭意、下書きちゅうですので、しばし、お待ちをー。

（2009/12/13）連載開始しました！マイペース更新ですが、よろしく願いします）

（2010/01/12完結いたしました！）

楽しんでいただけたら、さいわいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9450c/>

マリッサ・ノエル、エレ・ノエル

2010年10月8日21時10分発行